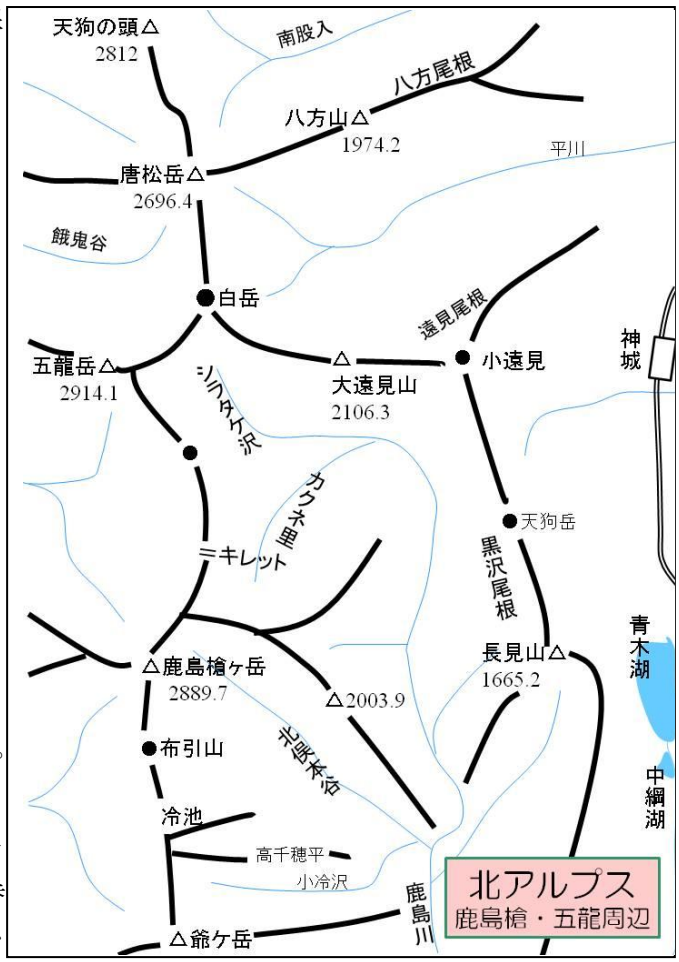
踏 み 跡 ＜ My mountains ＞

北アルプス	後立山縦走（五龍岳から唐松岳へ）	No. 132

6 月の爺ケ岳と 7 月の鹿島槍・五龍とで後立山の稜線はだいぶ身近な存在になった。主たる尾根筋では五龍から鹿島槍を経て種池まで歩いたことになる。
この稜線への企画の最終段として白馬三山を狙ってみることになった。
メンバーは前回の日光表尾根縦走の時と同じ、石関と井口。日光からの帰りの電車の中で決まったと言った方が正しいかもしれない。
計画としては、第一日目は遠見尾根を登って五龍へ、第二日目は五龍から白馬経由大雪渓を下って帰京というどちらかといえば強行軍の日程。



昭和　44年　9月　13日
残業になってしまい、集合時刻の 20 時 30 分に間に合わず二人には先に電車（22 時 30 分発）に乗ってもらい、後から飛び乗ることになった。
汗だくで新宿駅に駆け込んだものの連休前のため超満員で先に乗った二人がなかなか見つけられない。
辛うじて二人の姿を見つけはしたが側に接近することもできず、やむなく別な場所に飛び乗ったが、乗った場所が悪かった。グリーン車のデッキでひどい混み方。

昭和　44年　9月　14日
やむを得ずグリーン車の中へ入って床に腰を下ろしてうつらうつら。やがて検札にきた乗務員が 「グリーン券のない人は出てくれ」 と言う。ここを出たからと言って、移れる場所があるわけじゃあないいという理屈で、周りの何人かと結束して強引に居座り続けた。
甲府を過ぎてしばらく、もう諏訪が近い頃だったか目の前に席が三人分空いた。傍らの男が一人席に着いたのにつられて並んで着席。また検札が来たが、乗務員は交代したらしく先程の人ではなかった。「塩尻から」と言ってグリーン券を買って、ようやく眠りに入ることができた。
松本を過ぎても混雑は続き、大町でようやく大半の乗客が下車した。
神城で下車し、プラットホームでようやく石関、井口と対面合流。彼らも大混雑でまったく眠れずとのことで、特に井口の顔がそれを見事に表していた。わずかな時間ではあったが一人でグリーン車で眠ったことが悪いような気がしてきた。
駅で朝食をとり一服した後出発。緩やかな傾斜のスキー場の登りは眠い、眠い。遠見尾根への取り付き点付近の草むらは風もなく、一層眠気が襲ってくる。
遠見小屋までたどり着き中休止。湿気の多いガスがちの空、草の上で昼食と昼寝。
井口が 「調子が出ないので降りたい」 と言う。どうやら昨夜の夜行列車での寝不足がたたったようだ。やむを得ず荷物を整理して井口と別れて、石関と二人で出発。幸いなことに天候がすっきりしないためかんかん照りの太陽の攻撃がなく、長い尾根歩きもさほどの苦痛を感じないですむ。しかし、眠い。
小遠見で 20 分の休憩。小遠見を過ぎてしばらくで山らしい涼風を浴び、ようやく目が覚めてきた。
五龍小屋 15 時 30 分着。ガスの間に時々五龍の黒い岩肌が姿を見せてくれるだけで、その他の眺望は何も得られない。小屋の前にテントを張り、小屋で買ったビールで乾杯。明日の天気が良くないことはほぼ想像できるがどの程度の悪さだろうか？

昭和　44年　9月　15日
曇り、雲の中で景色は全くなし。あわれにもポンチョをかぶりトボトボ歩く自分を想像しながら白岳に向かう。
唐松岳まで来たらもう雨が少しずつ降り始め、一時間も歩かぬうちに雨宿りの休憩。
雨宿りに費やした時間は大きく、もう白馬まで行くのには時間が足りない状態になってしまった。結論として、八

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

方尾根を下ることに決定。朝一番の悪しき想像にたがわず黄色いポンチョをひるがえし、できるだけ早く下へ、下へ。ケーブルカー終点の駅に着いた時には汗と雨とでびっしょり。
窓に雨が叩きつけるケーブルカーで細野へ下り、かなり早い帰宅となった。なんとも冴えない山行だった。
「白馬は一日にしてならず」か？

以上